

会議記録

次の審議会（協議会）を下記のとおり開催したので報告します。

審議会等名称	第1回近江八幡市家庭教育推進協議会			
開催日時	令和7年8月28日（木）10：00～11：30			
開催場所	近江八幡市役所 南別館 教育委員会会議室			
出席者 ※会長等○ 副会長等○	<p><委員></p> <p>◎岡田委員 ○山岡委員 中江委員 富岡委員 安川委員 杉 委員 谷口茂樹委員 谷口美樹委員</p> <p><事務局></p> <p>安田教育長 古本指導主事 富永</p>			
次回開催予定日	令和8年 2月			
問い合わせ先	<p>所属名：近江八幡市教育委員会事務局生涯学習課 担当者名：富永 祐加 電話番号：0748-36-5533 E-mail：045000@city.omihachiman.lg.jp</p>			
会議記録	発言記録	・ <input checked="" type="checkbox"/> 要約	要約した理由	発言内容が整理され、記録として残すのに適しているため
事務局 課長	<p>1 開会 2 教育長あいさつ 3 自己紹介 4 委員の委嘱 5 会長・副会長の選出 ・会長：岡田委員、副会長：山岡委員に決定 6 会長挨拶 7 協議会および家庭教育支援基盤構築事業の説明 ・近江八幡市家庭教育推進協議会について</p>			
事務局 会長	<p>本協議会は、近江八幡市の家庭教育力の向上を目指し、啓発推進および充実を図るためにご参集いただいている。近江八幡市の家庭教育のあり方を検討し、様々な関係者と連携しながら、家庭や保護者の支援のために協議を重ねていきたい。</p>			
事務局	<p>・近江八幡市家庭教育支援基盤構築事業について 令和7年度地域における家庭教育支援の基盤構築事業の滋賀県の</p>			

	<p>要綱に基づいて、本市における家庭教育支援基盤構築事業を作成している。</p> <p>本事業は、学校・家庭・地域の連携のもと、家庭教育力の向上と保護者支援を目的として実施されている。</p> <p>市内 12 校に家庭教育支援員を配置し、各校の状況に応じて活動している。具体的には、あいさつ運動や保護者相談、子育てサロンの企画などを通じて保護者とつながっている。また、不登校児童への訪問支援、登校支援、子ども食堂の開設、学習支援の場の提供、校内での支援チーム会議の開催、アウトリーチ型の支援を実施している学校もある。</p> <p>課題として、困難を抱える家庭との関係構築が難しいこと、学校と支援員の連携強化が必要であることが挙げられている。啓発活動や連絡会を通じて改善を図っている。</p> <p>市としては、今年度も生涯学習課主催で子育てサロンを年間 5 回開催予定である。保護者の声に耳を傾け、支援者とのつながりを促進する場として活用していく。サロンのテーマには、滋賀県教育委員会が提示する「幼児期の終わりまでに育ってほしい 10 の姿」を取り入れている。</p> <p><意見・質疑応答がなかったため、情報提供と意見交流に移る。></p> <h3>8 情報提供と意見交流</h3> <p>「保護者支援や家庭の教育力向上に関する課題や取組の共有」</p> <p>①地域や学校・園における、家庭・保護者のかかえる課題や現状・取組について</p> <p>②困り感を抱える保護者へのつながりのある支援体制について</p> <p><各所属の取組の情報の提供を促す。></p> <p><こども園から></p> <p>社会の変化に伴い、保護者の子育て観や関わり方も変化している。特にスマートフォン等の普及により、子どもが受ける刺激や育ち方に影響が出ている。</p> <p>保育現場でも「サブスク」的なサービスが増え、オムツや布団の提供など、保護者が園を選ぶ基準が変わってきている。</p> <p>昔は保護者が子どもの排泄物を確認するなど、直接的な関わりがあったが、今はそうした機会が減り、保護者が子どもの様子に触れることが少なくなっている。</p> <p>保護者は悩みを抱えているが、以前のように手紙やメモで相談す</p>
会長 委員	

る文化が薄れ、検索や AI に頼る傾向が強まっている。その結果、情報に振り回され、身動きが取れなくなることもある。

教師として 40 年の経験から、子どもの発達の本質は変わらないが、育つ環境や文化の違いが大きく影響していると感じる。

若い保護者との関わりにおいて、世代間の言語や価値観の違いが壁となっている。年輪のように世代が重なり合い、共感しながら支援できる社会づくりが必要。

教職員も多世代で構成されている園では、保護者対応に柔軟性があり、若手職員の負担も軽減される。一方、小規模で若手中心の園では支援が難しくなる傾向がある。

保護者自身もつながりを求めている可能性があり、スマートフォンやカフェなど、気軽につながれる場や仕組みがあれば、支援者との関係性が築ける。

子どもは揺れながら育つものであり、家庭という出発点をどう支えるかが、生き抜く力につながる。今後も模索を続けていきたい。

〈質疑応答〉

会長

・会長のご意見

親を育てる視点は重要である。子育ては親の責任であり、保育現場が「任せておけばいい」という姿勢になると、親が育児に向き合う力を育てられない。遠足の準備などを通じて、親が主体的に関わるような指導が必要であり、「親になりきる」ための支援が求められている。

また、教育の連携と一貫性が必要である。保育園・幼稚園での教育が統一されていないと、小学校入学後に子どもが混乱する可能性がある。教育現場全体での連携や、保育から小学校へのスムーズな移行を意識した取り組みが必要だと考える。

保育の方向性転換への期待と課題 現場の中心人物が方向性の転換を試みているが、個人経営の園では職員任せになっている部分もあり、課題が残る。援助の仕方や職員への委任のあり方など、改善の余地があると考える。

今後の教育のあり方について、現代は「子育てしないといけない時代」であり、保育・教育の現場は「親育ち・子育て」に重点を置いた教育へとシフトすべきである。保育園・幼稚園が単なる預かりの場ではなく、親と子の成長を支える場として機能することが望ましい。

委員	<p>〈こども家庭センターから〉</p> <p>こども家庭センターでは保育教育を直接担ってはいないが、家庭支援の観点から以下の 2 つの事業を実施している。</p> <p>一つ目は、親子の絆づくりプログラム（委託事業）である。生後 2～5か月の第 1 子を持つ親子を対象に、月 4 回シリーズで開催している。内容は「赤ちゃんのいる生活」「親になること」などをテーマに、親子の愛着形成を促進している。また、参加者同士のつながりづくり（グループ化）も重視している。</p> <p>二つ目は、子どもの生活・学習支援事業（NPO 法人への委託事業）である。生活困窮世帯やひとり親家庭の子どもを対象に、学習習慣や社会性、生活能力の育成を目的として実施している。勉強の必要性を伝えることや、スタッフとの関わりを通じた社会性の育成を重視している。</p>
委員	〈質疑応答〉
委員	月 4 回実施される愛着形成支援プログラムについて、出生直後の子どもを育てる家庭に対して、こども家庭センターから案内を出し、プログラムへの参加するよう促しているのか、参加人数が何名かを確認。
委員	第一子を産まれた方に案内を送付している。定員は毎回 10 組を基本としている。今回は 8 組が参加予定。参加申し込みは 8～10 組程度で推移している。
委員	年間、第一子を産まれた方の何%ぐらいが活用しているか確認。
委員	第一子の出生率が正確にわからないため、パーセンテージについては把握していない。 プログラムは月 1 回実施しており、年間で 12 回の募集がある。第一子を出産された方の 100 組程度はご参加いただいていると考えている。毎回 8 組の参加があれば約 96 組になるため、96～100 組程度と考えている。
会長	市の広報で案内しているのか、こども家庭センターから案内を出しているのかを確認
委員	市民課などに出された届をもとに、こども家庭センターから各家庭

	に案内を送っている。
会長	<p><会長の意見></p> <p>妊娠・出産に関する不安を抱える方が多く、特に第一子を出産した後は1人で悩みを抱え込むケースが多い。現状では、相談窓口があっても気軽に利用されにくい状況がある。</p> <p>現在の取組は人数的にはまだ限定的だが、内容は非常に充実しており、価値ある活動だと感じている。出産を控えた方々の目に留まり、「ちょっと電話してみよう」「ちょっと見てみよう」と思えるような窓口になることが重要である。活動を安定化させることで、自然な形で地域に広がっていく可能性がある。今後も継続的に取り組みを進めてほしい。</p>
委員	<p><幼児課から></p> <p>幼児課の窓口対応時、子どもが iPad を見て静かに座っている様子から、現代の育児スタイルの変化を実感した。保護者は「そうでもしないと家事ができない」と話しており、家庭での育児の工夫と苦労がうかがえる。</p> <p>保育所・幼稚園では保護者と頻繁に連絡が取れるが、小学校に進学すると先生との接点が減り、悩みを相談しづらくなる傾向がある。園では「学校に相談してもよい」と伝えることもある。</p> <p>京都大学の教授の話では、学生は褒められる経験が少なく、人の関わりが希薄になっている。学生を褒めたいときに、教授が「抱きしめてもいいですか」と尋ねると、ほぼ全員が了承し、抱きしめられると涙を流す学生が多いという。肌の触れ合いが減っている現実に対し、教育現場では子どもの愛着形成の重要性を強く感じている。</p> <p>保育の現場で保護者との関係性や子どもの様子を見ながら、時代の変化を実感している。</p>
委員	<p><意見・感想></p> <p>スマートフォンや iPad に頼る育児が増えているが、親子の触れ合いや言葉かけが重要であり、0~5歳の時期が特に大切である。</p> <p>オムツの持ち帰りや排便の確認など、日常の中で親が子どもの変化に気づくことも「親育ち」の一環と捉えている。</p> <p>幼稚園は親子の関係性を確認・支援する場であり、小学校に入る前の時期が最も重要だと考えている。</p> <p>地域と学校の連携の必要性を感じており、夏休みには先生と子ど</p>

もが一緒に体験学習を行う子育てサロンを開催した。子育てサロンを通じて、保護者が教育活動に触れる機会を設け、地域と学校の相互理解を促進している。保育現場では保護者に対して率直に伝える姿勢を大切にしており、Yes／Noをはっきり伝えることが信頼関係につながると考えている。

親と祖父母の役割の違いを理解するために「おばあちゃん教育」に参加した経験もあり、個々に合った伝え方の重要性を実感している。

幼稚園や小学校低学年の段階で、愛着形成や親育ちを支援する取組を今後も継続してほしいと考えている。

<会長の意見>

会長

0～3歳の時期に親から受けるぬくもりや関わりは、一生忘れないほど重要であり、愛着形成の基盤となる。親子の触れ合いや一緒に過ごす時間（抱っこ、添い寝、声かけなど）が、子どもの心の安定につながる。保育園・幼稚園などの教育現場でも、若い保護者に対して基本的な育児の大切さを伝える機会を持つことが望ましい。

校園所では、日々の小さな変化（疲れた表情、様子の違いなど）を察知し、声をかける存在が身近にいることが、保護者にとって大きな支えになることがある。

親が自分の親から育てられていない場合、自分の子どもに育児を伝えることが難しくなるという世代間の課題がある。それでも人は育つ可能性があり、地域や教育機関がその「育ちの場」として機能することが重要。

一人ひとりのふれあいを大切にし、校園側もその立場を活かして支援していくことが求められる。子育て支援の取組が新しい発見につながる可能性もあり、今後も継続的に関係性を育んでいくことが大切である。

<教育研究所から※リーフレットを提示して説明>

委員

数年前から市内中学生全員に教育相談リーフレットを配布しており、周知が進んだことで教育相談室の利用者が増加。保護者が直接予約するケースも見られるようになった。

令和5年度の教育支援ルームの支援回数は146回から952回へと大幅に増加し、子どもたちの居場所として機能している。同じフロアに臨床心理士や相談室があることが支援の強みであり、夏休みも自律性を尊重した対応を実施した。

学校に苦手意識を持つ保護者も多く、子どもの活動場所として教

	<p>育支援ルームが活用されている。</p> <p>外出が困難な子どもへのアウトリーチ型訪問支援も実施しており、手紙や誕生日メッセージなどを通じて関係性を築いている。</p> <p>中学校卒業後も支援が途切れないよう、少年センターや子ども若者相談窓口と連携し、伴走型支援を継続している。</p> <p>医師・保健師との連携も進めており、学校だけでは対応困難なケースに対して専門機関への橋渡しを行っている。教育相談室には臨床心理士や元養護教諭が在籍し、保護者からの電話相談も増加傾向にある。</p> <p>訪問教育相談員は各校に出向いて支援を行っており、家庭訪問も実施しており、学校内でのケース会議の主導など、役割が拡大している。</p> <p>不登校支援ネット会議を年1回増やし、保健師との情報共有や研修を通じて支援体制を強化している。</p> <p>小学校低学年の「行き渋り」対応として、公立幼稚園に訪問教育相談員を月1回配置。園長からも好評で、今後他園への拡大を検討中である。保護者が相談に慣れることを促進するため、園の先生以外にも相談できる場があることを周知している。</p>
会長	<p><質問></p> <p>にこまるルームや訪問教育相談員と校園の連絡の取り方と連携について確認</p>
委員	<p>にこまるルームやにこまる訪問の利用などの支援を学校内で活用する際、ケース会議が開かれることがある。校長や管理職の先生から直接連絡がある場合もあり、訪問教育相談員が関与することもある。</p> <p>訪問教育相談員の先生は毎月訪問しており、限られた時間の中で可能な範囲で情報共有や支援を行っている。</p> <p>すべての児童・生徒の支援や相談対応は難しいが、現状を把握し、報告書を毎月研究所に提出している。</p> <p>月1回の「担当ケース報告会」には、保健師や臨床心理士も参加し、必要に応じて学校でのケース会議の提案や、他機関との連携について話し合われている。</p>
会長	<p><意見></p> <p>研究所は数十年の歴史があり、学校側はその機能を十分に把握する必要がある。現状では、学校側の理解が不十分な部分があり、支</p>

	<p>援の利用が一部の児童・生徒に限られている。利用が進まない背景として、情報の浸透不足や認識の差が課題と考えられる。</p>
委員	<p>利用者数は増加傾向にあり、支援の周知も進んできている。距離の問題や小学生については保護者の送迎が必要なため、利用したくても難しいケースがある。</p> <p>学校内のスペシャルサポートルームの利用も増えており、校内支援の充実が進んでいる。そのためか、今年度はにこまるルームの利用者数は減少している。全体として、児童・生徒のニーズに合った支援が受けられる環境が整いつつある。</p>
副会長	<p>＜学校での支援体制の補足＞</p> <p>保護者の送迎負担や交通手段、子どもの様子などを踏まえ、支援の利用に課題があるケースもある。学校内でスクールソーシャルワーカーによる対応や訪問支援が増えており、支援の選択肢が広がっている。</p> <p>ケース会議では、各家庭に最適な支援方法を検討し、学校内での紹介やマッチングを行っている。支援体制が充実してきたことで、より柔軟な対応が可能になってきている。</p>
会長	<p>＜意見＞</p> <p>学校の理解が深まり、支援が充実するといいと思う。</p>
委員	<p>＜写真回覧し、活動を説明＞</p> <p>8月に「こどもまつり」、7月には「お抹茶体験」などの地域イベントを実施した。教師と子どもが一緒に活動することで、学校とは異なる子どもの姿が見られ、非常に有意義だった。ヨーヨー作りなどの体験もあり、教師の協力で子どもたちが楽しめる場となった。</p> <p>お抹茶体験時には子育てサロンも開催し、保護者が4名参加した。中には親から離れられなかった子どもが、親と離れて活動に参加できるようになり、保護者も喜んでいた。</p> <p>今後もこうした場を継続し、参加を促す広報活動も行っていく予定である。次回は資料の整理・提出も検討したい。</p>
会長	<p>＜感想＞</p> <p>教職として学校内で活動する教師が、地域と関わる機会は少ない</p>

	<p>のが現状である。地域での活動を通じて、教師が子どもたちと新たな関係性を築き、熱心に関わる姿が見られるようになってきた。地域の中での子どもを知る貴重な機会となつておる、今後もこうした取り組みは有意義であると感じられた。</p>
委員	<p>地域活動と子どもへの働きかけについて、小学校を中心に、地域事業への子どもの参加を促してきた。今年から「子どもの心に火をつける」ような取組を提案している。</p> <p>ウィリアム・アーサーの言葉に「偉大な教師は子どもの心に火をつける」という言葉がある。地域の役割は、単なる参加促進ではなく、子どもが前向きにしなやかに生き抜く力を育むことである。学区では、福祉部長、人権共生部長、文化生涯学習部長、青少年育成部長の4名に協力を依頼し、協議を重ねているが、8月時点では議論がまとまらず、9月11日に再度ゼロから話し合う予定である。</p> <p>課外活動・クラブ活動を通じた主体性を育む取組と現場対応力の育成が大切である。明治22年創設の大学スポーツクラブにて、8年間監督経験がある。コロナ以降、ティーチング中心から「自主性・主体性」重視の指導へと変化している。子どもたちに「自分で考え、自分で解決する力」を育てることが重要と認識している。現場では、保護者対応に時間を取られ、子どもが部活動をすぐに辞めてしまう傾向がある。昔は「我慢して乗り越える」姿勢があったが、今は保護者がすぐに介入するケースが増えてきている。対人関係だけでなく、「自分自身の問題を自分で解決する力」を育成することが必要だと考える。</p> <p>江戸時代の侍教育（漢文・道徳・現場対応力）を例に、現代の教育に必要な要素として「AI活用」「英語力」「道徳」「自己解決力」があるのではないかと考える。地域として、子どもの心に火をつけるような支援をどう実現するかを検討することが必要である。自己解決能力の育成と地域の関わり方について、今後も地域が幼保小中と相談しながら進めたい。地域には地域の良さがあると改めて実感している。</p>
会長	<p>＜感想＞</p> <p>学校では育ちにくい部分を補う場として、保育園・幼稚園の教育が重要である。特に3歳からの5年間の教育が子どもの成長に大きく影響する。</p> <p>スマートフォンやゲームに長時間触れる子どもが増え、経験不足や自己制御の難しさが課題となっている。テレビでも取り上げられているように、現代の子どもたちはスマートフォンなどを離せない、ゲームをやめられない状況に陥りやすい。</p>

	<p>現在、中学生のソフトボール指導の現場では、暑さや体力的な負担からすぐに諦める子どもが増えている。部活動離れや少子化の影響もあり、活動の継続が難しくなっている。</p> <p>家庭でのゲーム中心の生活が体に染みついており、努力や汗をかく活動を避ける傾向がある。エアコンの効いた部屋でゲームをすることが快適とされる風潮が広がっている。</p> <p>学校行事ではなく、地域活動が子どもたちの成長にとって重要な場となっている。親の関与が複雑化することで活動が困難になるケースもあるが、地域の力で子どもを育てることは有意義である。地域活動者にも期待し、地域の人々が主体的に動くことで新たな可能性が生まれると考える。</p>
事務局	<p>＜協議の終了＞</p> <p>＜幼稚園の取組を紹介＞</p> <p>幼稚園では、保護者がボランティア活動などに積極的に参加しており、PTA活動を通じて保護者同士の交流の場が形成されている。</p> <p>保護者がインターネットなどから得られる多くの情報により、必要以上に心配したり、ネガティブな感情に流されてしまうことを防止するため、9月には、スマートフォンやタブレットなどの使用に関する課題をテーマに、インターネットとの向き合い方についてのPTA講演会を開催予定である。</p> <p>＜委員の取組を紹介＞</p> <p>昨年度は、PTAで子どもの性に関する講演会を開催した。今年度は保護者同士の繋がりを大事にするため、給食等の試食を通して、保護者が気軽に話せる場を設定していく予定である。</p> <p>＜事務連絡＞</p> <p>次回のおおまかなテーマと開催時期の伝達</p>
副会長	<p>閉会の挨拶</p> <p>終了</p>

担当課⇒総務課